

「底が突き抜けた」時代の歩き方 295

死は人間の永遠の不在を繋がり記憶で埋めていく

－ 映画『息子の部屋』

人は誰も、自分の死を体験することはできない。しかし、関係の死は体験することができる。近しい人の死が悲しいのは、その人との関係が途絶えてしまうからである。その関係の死の中に、人は自分の死を否認なしに覗き込み、確認している。つまり、人は自分自分の死そのものに直接出会うことはできないが、近しい人との関係の死を通じて、自分の死を一つ一つ味わう。近しい人の不在は、自分の心の中に占めているその人の不在として、自分の中に確実に一つの空洞を残していく。近しい人の死がもし最も愛する者の死として訪れてくるとき、人はどのようにして耐えようとするのだろう。いや、耐える以外になす術はないのだろうか。

最も愛する者の死に我が身を引き裂かれる思いに駆られるのは、いうまでもなくその者を自分がもう愛することができなくなってしまうからだ。愛する者が自分にむかって、愛をたえず誘発する微笑をもう投げ返すことができなくなったからだ、といってもかわらない。最も愛する者はいつも自分の隣に座っている。もう一人の自分のように異なる顔を突きだしながら、自分の隣に寄り添って座っている。要するに、一緒に暮らしている。家族という場所は本来的には、愛する者同士で成り立つ最も自然な関係であり、そこで人間らしさというものが育まれていく。だけど、最も自然な場所であるが故に、普段は愛し合っている関係が目立つことはなく、深く沈潜している。愛は愛の不在のときに、最も強く意識されるにちがいない。だから家族の中で一緒に暮らしてきた者が欠けるとき、最も自然な関係である家族は最も不自然な関係になっていく。家族の中の欠落を家族自身がどうしても認めたくないからだ。

ナンニ・モレッティ監督の映画『息子の部屋』は、息子の突然の死によって家族の中に生じる欠落、あるいは喪失に、父親が、母親が、姉である娘がどのように向き合い、充実を感じ取って歩みだそうとしているか、を描きだす。

イタリアの小さな港町に住む精神分析医のジョバンニ（ナンニ・モレッティ）は、妻のパオラ、娘のイレネ、息子のアンドレアと、ごく一般的で平穏な毎日を過ごしていた。いや、まだ悲劇に遭遇していない日々を過ごしていた。日々の平穏さは自らがたえず引き裂かれることを願って悲劇を孕もうとすることで、その退屈に耐えている。ある日曜日、ジョバンニは息子とジョギングをする予定を立てていたが、「どうしても気分がふさぐので話を聞いてほしい」という患者からの電話が入って、仕方なくそちらを優先する。ところが友人とダイビングに出かけた息子が、潜水中の事故で死ぬという悲劇が起こる。ジョバンニにとって息子とのジョギングは、永遠に後回しになってしまった

のである。

つい今しがたまで元気に喋り、笑っていたアンドレアがもう二度と目の前に姿を現さなくなるなんてことを、家族の誰も信じられないし、受け入れられない。仕事を優先したジョバンニは、患者など断って自分と一緒にジョギングをしていれば、息子はダイビングになど行くこともなかったのに、と自分自身を苛む。彼は自分を落ち着かせようとするが、不意に取り乱し、妻とも感情の些細な行き違いで喧嘩になり、娘は両親の不安定な関係をもろに受けて悩む。息子が欠けたことによって、家族の歯車が噛み合わなくなっていく。夫婦揃って息子のテニスの試合を応援したり、父は息子とのジョギングを楽しむ仲のよい家族であったのに、息子の死を境に家族の行動は一変する。ジョバンニは一人で散歩し、妻は夫と同じベッドで寝ることを拒否し、娘はそんな両親を支えられない自分に落ち込んでいく。

「あの日、自分が往診にさえ出なければ」という自責の念が高まってき、患者以上に精神不安定になったジョバンニは、遂に診療所をたたみ、娘は恋人ともうまくゆかなくなり、別れてしまう。強い絆で結ばれていたようにみえた家族の関係は、息子の死によってそのたがが外れていく様子が、ジョバンニがガラス食器を直火にかけて割ったり、キッチンには汚れたお皿が置かれたままに、ソファには毛布がそのままに……といった雑然とした暮らしの中に描かれていく。各々が思い思いの方向に空虚に流されていきつつあるそのとき、息子宛の一通の手紙が届く。差出人は、息子が夏休みのキャンプで知り合ったガールフレンドだったことがわかる。家族の知らない息子の秘密がいきなり射し込んできたのだ。「その子に一度会ってみたい。アンドレアを失った悲しみを分かち合いたい」という妻に対して、ジョバンニは息子の秘密を垣間見る恐れからか、反対する。ある日、彼女が突然訪ねてきて、応対したジョバンニにアンドレアから彼女に送られてきた数枚の写真を見せる。そこには、家族の誰にも見せたことのない笑顔の息子が、自分の部屋でゆったりとリラックスしている様子が映しだされていた。

息子は家族の知らない、心から打ち解けた表情を、彼女にだけ向けていたのだ。アンドレアは自分たちの知っている息子ではなく、自分たちの知らないアンドレアがそこにいることを、そのとき家族は発見したのである。息子の部屋は自分たちの息子として育ってきた場所であるばかりでなく、自分たちの知らないアンドレアを育ててきている場所でもあることを、家族はそれらの写真に見て取ったのだ。ジョバンニも妻もアンドレアを自分たちの息子としてしかみていなかったことに気づき、家族も覗き見ることでできなかったアンドレアの世界に触れて、肩の荷が下りた気分になり、冷静さを取り戻していく。もう一度訪ねてきたガールフレンドとそのボーイフレンドを車に乗せて、ジョバンニは家族全員でフランス国境まで送ってやる。狭い乗用車にぎゅうぎゅう詰めになった小旅行が、息子の死後残された三人の家族の閉ざされ、傷つけあってきた関係をじょじょに融かしていきつつあるのが感じられ、ガールフレンドを見送った後、白々とした夜明けの光に包まれて、三人は静かに波が打ち寄せる砂浜に佇む。あたかもアンドレアが亡くなった海に鎮魂の思いを伝えようとするかのように。

映画の題名があくまでも『息子の部屋』であって、「息子の死」ではないところに、

時空の拡がりを感じられ、すでに死んでいなくなった息子が「息子の部屋」の中で、見えない姿のまま育まれつつある雰囲気が醸成されているかのような気がする。当初、この映画を観て思い浮かべたのは「幻肢」である。事故や手術などで手足を失った後にも、それがあるような感覚が残っているという事実だ。なぜ「幻肢」のような不思議なことが起こるのかについては、一般的に次のように説明されている。脳の表面には体の表面に触れた時に反応する部分があり、たとえ片腕が失われても、片腕から脳につながる神経は切断されているわけではないので、脳のほうは片腕が依然としてあるかのようにみなしつづけている。つまり、身体としての片腕は失われていても、脳の中でイメージされている片腕は生きつづけているために、「幻肢」ということが起こりうるのだ。

片腕を息子に、脳を家族に置き換えるなら、息子は事故で死んでいるのに、息子を含む関係で成り立っていた家族の中では、息子がいつでもふらっと姿を見せるような感覚が残っている。息子の死後も「息子の部屋」を手付かずのままにしておくのは、いつかどこかから息子が舞い戻ってくる気がするからであり、たとえ息子が死んでいなくなったとしても、家族の中ではいつまでも生きつづけているという思いをそこに込めているからであろう。死んだ息子と一緒に家族が生きているという感覚が、手付かずの「息子の部屋」としていつまでも残されているのだ。「幻肢」が人間にとって自然な感覚であるなら、家族の関係の中で「息子の部屋」を維持しつづけることもまた、自然な感覚にちがいない。

最も愛する身近な者の突然の死が、哀切さに満ちていることはいうまでもない。その死が息子や娘であるなら、親にとって哀切さもひとしおであろう。どうしても生きてきた時間の長さに換算せざるをえなくなるし、青春の盛りで死に直面することの不条理に耐えられないからだ。その哀切さは同じ感情を共有しあう家族が共に慰めあうことによつてのみ、時間の経過の中で薄らぎ、癒されていくのだろうか。だが映画が描くように、哀切さを共有しあっているにもかかわらず、いや共有しあっているからこそ、余計に互いが互いをいたわり、慰めあうよりも、傷つけあう途に突き進んでいこうとする。息子の死を基軸にして生き残っている感覚の負い目を、自分自身に差し向けるように家族に差し向けてしまうからだ。別のいいかたをすると、ジョバンニは自分と妻や娘との関係を、亡くなった息子との関係を通じてしかみなくなってしまうのである。このことはジョバンニにとって、いま自分の目の前にいる妻や娘がみえずに、死んだ息子との思い出の中に引きこもることを意味していた。

どうしてもいまも生きている妻や娘との関係を大切にしながら、ジョバンニは息子のことも忘れずに歩を進めようとしなないのだろうか。どうして家族の中でぽっかりと穴がいてしまっている息子への思いを中心に据えながらしか、生きていけないように思われているのか。これまで紡ぎだされてきた「家族の物語」が息子の死によつてもはや維持しえなくなったことに、彼は打ちのめされているからだ。「家族の物語」にとって重要なファクターであった息子の死がもたらす物語の崩壊は、その物語の強力な推進者であったジョバンニの空虚な感情をどうしても不在の息子へと向かわせてしまう。息子の死が刻み込む「家族の物語」の死の中に、ジョバンニは自らの空虚を投げ込む以外になす

術がなくなっている。しかしながら息子のアンドレアは、ジョバンニが望む「家族の物語」を維持するためにのみ生きているわけではなかった。それは、妻も娘も同じであった。本当はジョバンニ自身もそうであった筈だ。

車中でジョバンニがカーステレオに合わせて歌うと、妻も子供たちも歌いだし、家族全員の合唱になってしまう映画の気恥ずかしく、そして押しつけがましいシーンがあったが、それがジョバンニの望む「家族の物語」であった。妻も息子も娘も、その「家族の物語」に敢えて逆らう理由は持たなかったが、さりとしてその物語の中でのみ生きているわけではなかった。家族全員が協力し合って物語を維持しつづけねばならないと考えるジョバンニには、そのことがわからなかった。息子の死はあくまでも息子も含んでいた「家族の物語」が維持されなくなっただけであって、自分と妻、娘が生きつづける「家族の物語」を新たに紡ぎだしていけばよかったのに、彼にとって息子の死は「家族の物語」そのものの死を意味しており、彼はその物語の不在の中でさ迷わねばならなかった。

精神分析医であるジョバンニは冒頭で、患者にむかってこういう。「何が起きても自分の責任だと感じていらっしゃるようですね。しかし、人間の一存ですべてが決まるわけじゃありませんから」この言葉が息子の死を契機にして、鋭く彼自身に投げ返されてきたのだ。仕事を優先せずにアンドレアとジョギングしていれば、息子を死なせずに済んだと負い目を抱きつづける彼は、息子を死なせたのは自分の責任であり、したがって「家族の物語」を中絶たらしめたのも自分の責任であるという、まさしく「何が起きても自分の責任だと感じ」る方向に自分を追い詰め、「人間の一存ですべてが決まるわけじゃありません」という地平に、自分や妻や娘や、死んだ息子も解放しようとはしなかったのである。

家族の誰も知らなかった息子のガールフレンドの出現によって、ジョバンニは死んだ息子への全く根拠のない負い目に引きずられていきつつある自分の姿に気づき始めるが、それは、「家族の物語」にけっして回収されない自分の物語を紡ぎつつある息子を垣間見たからだ。アンドレアの死はジョバンニにとっては息子の死にほかならなかったが、彼のガールフレンドにとっては親密なボーイフレンドの死にほかならないという、息子を取り結んでいる多様な関係にジョバンニは改めて思い至ったのである。しかも次に出会った息子のガールフレンドは、もう新しいボーイフレンドを同行していた。アンドレアとの記憶を胸の奥に畳み込んで、彼女は停滞することなく自分の物語にむかって歩き始めていたのである。ジョバンニが彼女とボーイフレンドを車でフランス国境まで送ってやることは、そんな彼女を受け入れようとしていたことを意味する。その小旅行に妻も娘も同行することによって、ジョバンニは息子の死と共に崩壊しつつあった「家族の物語」からようやく解放されようとする自分自身を見出していたのだ。

生きていた頃の息子がガールフレンドとの間で家族の誰も知らない、たとえわずかな時間であろうとも、充実した時を過ごしていたことを窺わせる数枚の写真から、最近上梓された立松和平の『日高』（新潮社）という作品を垣間見ることができるようになる。現時点ではこの作品に目を通してはいないが、三浦雅士と津島佑子の書評を一瞥すると、映画『息子の部屋』と折り重なってくる印象が感じられるのだ。津島佑子はこ

の作品について、『朝日新聞』(01.9.26)の中で次のように書き記している。

《大学山岳部の6人編成のパーティーが三月、日高山脈の最高峰である幌尻岳登山にのぞむ。北海道の山なので、春といっても、冬山と変わりはない。途中、豪雪のため、谷の斜面に雪の洞を作り、そこで夜を過ごす。夜中に雪崩が起こり、一人を除く全員が眠ったまま、一瞬のうちに死んでしまう。偶然に生き残った青年も、凍った雪に閉じ込められたまま、遺書を残して、やがて死んでいく。

青年が一人きりで過ごした生の戦いの時間は、この遺書が残されなければ、だれも知りようがない。遺書の言葉は、言葉としてではなく、すでに死の領域に追い詰められた人間の、最後の純粋な生の証として、私たちに託される。

作者の想像力はしかし、この遺書の言葉からさらに飛躍して、氷づけになった青年の見る夢の形として、時空間を軽々と越え、ひろげられていく。夢のなかで青年は恋人と婚約し、夏の登山を楽しみ、結婚し、果ては、赤ん坊まで生まれる。いかにも若者らしい、楽しく美しい夢ばかり。夏の幌尻岳山頂にも妻と二人でたたずむ。

「……今やっとすることができたのだ。沈黙の中で、二人は山々を眺めていた。もはや恐ろしいものは何もなく、ただただ美しいばかりであった。」

悲惨なはずの冬山の遭難を描きながら、作者は逆説的に、生の喜びをそこから見いだす。悲しみと喜びが同時に、人間の生と死の境界線上には存在する。》

三浦雅士の評言(『毎日新聞』02.3.3)を、更に付け加えておこう。

《すべて克明で、それ以前の記述と異なるところがない。細部には注意深く夢の縁取りがほどこされているが、人と自然の生き生きとした描写がそれを押し退けてしまう。昇と裕子はあるべき人生を夢の中で、それもじつに色彩豊か香り豊か、に生きてしまうのである。

こうして小説の主題が明確に打ち出されてくる。闇の中に胎児のように横たわって昇は夢を見続けるが、それもまたもうひとつの人生ではないか。いや、小説とはもともとそういうものではないか、という主題が。

小説は若者たちの死で終わっているわけだが、残るのは不思議なほどの充足感である。まるで夢幻能に立ち会ったかのような充足感だ。幻想が現実を凌駕(りょうが)すると言ってもいい。舞踊はつねに死と再生にかかわるが、見事な舞踊を見終えたのと同じ感動をこの小説は与える。》

映画の息子はこの小説のように、遺書を残しているわけではないが、数枚の写真を遺している。またダイビング中の一瞬の事故のために、息子は小説の青年のように、死に直面している時間の中で思いを寄せるガールフレンドとの楽しい生活を夢見たとは思われないけれども、夢といえるものはたえず一瞬であって、時間の長さとは関係がない。水中で息が苦しくなって朦朧とするなかで、息子が小説の青年と同じような夢を見なかったとはいいいきれないし、また異なる夢をみていたかもしれない。あるいは、苦しさのあまり夢などみなかったかもしれない。しかし、写真のなかの息子が小説の青年と同じように、後に辿る運命を知らずにある充足感に浸っていたらしいことが大事なのだ。小説の青年が遭難の悲劇に襲われ、たとえ死に直結する夢のなかで、いや、死に直結する夢

のなかだからこそ、現実ではもはや叶えられなくなるその後の楽しい人生を思い描くという、その夢幻の一瞬の人生も「もうひとつの人生」とみなすなら、もしかすると写真の中の息子が思い浮かべていたかもしれない夢幻も、「もうひとつの人生」とみなせる。

人は誰でも現実の中だけで生きているものではない。夢の中でも生きている。その夢が現実のものとなるのは稀だとしても、夢の中で生きている人生というものもあるのではないか。たとえ現実の痕跡が皆無であったとしても、人は現実側からだけでなく、その人がかかえこんでいた夢の側からも覗き見なければ、その人の全体が浮かび上がってこないという思いが、二人の書評の中の小説から伝わってくる。よくよく考えてみると、人は生まれてこの世で呼吸している時間に較べるまでもなく、生まれる前と死んだ後の時間のほうが膨大であり、永遠である。もし人の一生について、生まれる前と死後も含めて考えるなら、この世のたかだか8、90年ほどの人生自体が一瞬の夢幻に思えてくる。そうすると、若年の死であろうと老年の死であろうと、時間の量にかかわらず、この世に生まれてきてよかったと一瞬でも思える生きかたでありさえすれば、過不足はないにちがいない。それが現実の中で困難なら、夢の中で果たされることもありうるのではないか、という声が映画や小説から強く響いてくる。

ところで、どうして我々は死を恐れ、特に若年の死を悲しむのだろうか。チベットやネパールの人々は、「死んでも生まれ変わる」から死は少しも恐くはない、と明るく語るといふ。輪廻転生を信じられたら、確かに死は恐くはない。死が恐いのは死ねばそれっきりで、永遠に無の彼方に消え去っていくしかないと思われているからだ。死の後にも続きがあると信じられれば死は恐くはないが、信じられなければ死が恐くなるのであれば、死を恐くないと思うために、人は皆死後の続きを信じるようにすればよい。しかし、それは無理である。なぜなら、かつてはすべての人が輪廻転生を信じて、死を恐れてはいなかったが、科学が発達して、この世での生以外にどこにも生がないと思われてくるにつれて、死はこの世から永遠に人を奪い去っていく忌むべきことと恐れられるようになったからだ。

今回の同時中樞テロの犯行者たちも、死後の続きを信じて果敢に殉教の精神を発揮していったにちがいない。軸足はすでに死後の世界に置かれていたのであろう。もしそうみるなら、今度の衝突は死後の世界と現世の世界との対立ともみなされる。チベットやネパールの人々が信じているような意味での死後の続きは、西欧の価値観を共有している我々には信じ難くなっているが、それでも「記憶」というかたちで死後は引き続いている。人は死んでも、友人や家族の記憶の中でその人は生き続ける。小説『日高』の遭難した青年がわずかに残された時間の中で見続ける夢もまた、「もうひとつの人生」と考えられるなら、亡くなった人が友人や家族の記憶の中で生き続けることもまた、死後の続きとしての「もうひとつの人生」と思われてくる。“死ねば死につきり、自然は水際立っている。”けれども、どっこい、亡くなった人は記憶として友人や家族にいつまでもつながっているのだ。

2002年4月6日記